HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	F・M・ヤング著/土屋 博・幸子共訳「牧会書簡の神学」
Author(s)	赤城, 泰
Citation	基督教学, 36, 30-33
Issue Date	2001-06-29
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/46634
Type	other
File Information	36_30-33.pdf

Instructions for use

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

書評

F・M・ヤング著／土屋 博・幸子共訳『牧会書簡の神学』（新教出版社）

赤城 泰

本書は、Frances Margaret Young, The Theology of the Pastoral Letters, Cambridge University Press,1944,の邦訳である。著者ヤング女史はバーミンガム大学神学部教授で専門分野は初期キリスト教神学と聖書解釈と聞く。[1] この程、北海道大学大学院文学研究科教授・土屋博、同夫人幸子両氏の共同作業が実を結んで日本語訳が完成、出版された。土屋教授にはすでに牧会書簡の綿密な本文批評に基づく私訳と釈義から成るすぐれた著作がある。[2] それゆえ、読者はいま、著者にも訳者にも全幅の信頼をおいて、最近の牧会書簡を取り巻く学界の情勢を学ぶことができるのである。

ところで、本書はもと「新約聖書神学」を全体の主題として企画された叢書の中の一巻であった事から察すれば、「牧会書簡の神学」というテーマは彼女が進んで選んだと云うよりは外から与えられたものであったかも知れない。事実、長年の牧会書簡に対する学界の低い評価を反映してか、彼女自身「牧会書簡の中には神学的記述はあるが、神学的論議はほとんどない」（二九頁）と述べている。これらの手紙に共通の特徴は「倫理的教え」に終始している、だから問題は「これらの書簡の倫理的関心にどの程度神学が附随しているか」ということになる（同頁）。かりに与えられた表題だったとしても、著者は「倫理」の角度から接近して牧会書簡の初期キリスト教史における位置づけの再確認の作業と積極的に取り組んでいると云えるであろう。そしてこうした研究の背後には近年の新らしい牧会書簡評価の学界の動きが出てきたこともある（e. g. Donelson 1986, Towner 1989等）。

右に述べた牧会書簡への倫理的アプローチを遂行するに当たって、ヤングには明確な信念があった。「神学と倫理は不可分」（三三頁）がそれである。だから著者は

この主題（牧会書簡の神学）を取り扱うに当たり、古典的な神学の枠組みの中での論述ではなく、いわゆる倫理の方向に書簡の素材を書簡自身に即して展開するという手法をとる。そしてこの「倫理」の内実は、著者によれば、明確に「健全な教え」（テト一二章）に基づく「善い業」（καλὸν ἔργον, テト三章）と固く結びついている（三四頁）。「善い業」は「救いの結果であり、救いは救い主なる神から来る。…牧会書簡の倫理はその根本にあって神学的である。」（三八頁）かくして、「異なる教え」（エテモ一・三）とその結果としてのもろもろの「悪しき行為」（「悪徳表」を見よ）は断固教会（＝家庭）から排除されなければならないのである。

こうした「悪しき行為」はユダヤ的黙示文学的熱狂主義者、グノーシス主義者らの侵入によって惹き起こされることが多い。牧会書簡はこうした「異なる教え」に対する警戒の念を露骨に表現する。「この手紙は、神の命令、すなわち、神が教会のうちに立てた秩序への服従の呼びかけである。」（一一五頁）

これらの手紙の背後で期待されていたものは、安定した家庭と「家の教会」との類比的理想の姿であった。そのような成長過程にある初期キリスト教団における生活はまさしく終末論的「時の間」に置かれていた。（九〇頁）そのような状況を約言すれば、そこにあったのはヤングのいわゆる福音の「文化的受肉」（inculturation 一九二頁）に他ならない。ヤングはそのような情況を次のように述べる、「現代の教会の周辺には…さまざまな種類の急進主義がある。…（しかし）社会はある種の安定を、公的生活は忠実な奉仕の伝統を、平和は法と秩序の伝統を求める」（一九四頁）のである。こうして「福音は『文化的受肉』へ向かう必要がある。われわれは、多元的世界の中で、日常のキリスト教がどのように見えるのか、社会にかかわる少数者として、キリスト教徒がどのように責任をもって生きていくべきかについて、何らかの考えをもつ必要がある」（一九六頁）と彼女は訴えかけるのである。

云うまでもなく、キリスト教倫理の根本問題は、人はいかにしてこの世に生きつつ、なおキリストに従う者であり続けることができるか、という問いに要約されよう。(3)

それへの答えの一つはアレクサンドリアのクレメンス(Clement of Alexandria, 150? - 215?)の考え方、すなわち「キリスト」は「文化」の上に置かれるという区別はあるが、決して相互に分離されてはならない、とする立場(リチャード・ニーバーの第三類型「文化の上なるキリスト」"Christ above Culture")で、ヤングも「クレメンス第一書」を引き合いに出しているのは興味深い(五三頁以下)。

世に在るキリスト者とは、主なるキリストを信じつつ、この世に生きる者を云う。彼は世の中に生きるが、世のものにはならない。

このように見てくると、牧会書簡は、初期キリスト教団の発展段階の一時期における文化的受肉の苦闘の足跡を記した輝かしい一箇のモニュメントのようにも見えてくると、評者はヤングと共に云いたくなるのだが、いかがなものであろうか。[4]

ともあれ、「訳者あとがき」で土屋教授は原著について「現時点における牧会書簡研究としては、望みうる最高の水準に達している」(二一六頁)と述べておられるが、評者は本書日本語版の全体について同様に「望みうる最高の水準に達している」との評価を喜びをもって表明して、本評を終わりたいと思う。[5]

注

(1) 本書「訳書あとがき」には、ヤングが占めた教授の椅子は"Cadbury Professor of Theology"と書かれている。もしこの名稱があのキャドベリを指すならば、それだけでも本書に対する学問的信頼性は十分に保証されていると云っても過言でない。

ヘンリ・J・キャドベリ(Cadbury, Henry Joel, 1883-1974)はアメリカが生んだ著名な新約学者、また熱心なクエーカーの平和運動家、母校ハーヴァード大学新約学教授(1934-54)、アメリカ聖書改訳委員、聖書文献学および解釈学会長など各方面に活躍した。数多い業績の中でも、The Making of Luke-Acts, 1927;イギリスの新約学者K・レイク(Lake, K.)との共同労作The Beginnings of Christianity, Part 1 : The Acts of the Apostles, 1933 ; The Book of Acts in History, 1955等は不朽の名作と云

われる。同時に彼は長年にわたりクエーカー（フレンド派）の歴史を研究し、自ら平和運動に尽力してAmerican Friends Service Committeeの創設に関わり、その議長をつとめた（1928-34, 44-60）。一九四七年ノーベル平和賞を受賞したのもまことに宜なるかな。ヤング女史の教授席が彼の名を記念しているとすれば、すばらしい事と思うので一言した。

（2）土屋博『牧会書簡』日本基督教団出版局、一九九〇年、二四〇頁。

（3）イエール大学神学部のキリスト教倫理学教授H・リチャード・ニーバーはキリスト教倫理の歴史と類型を扱った名著『キリストと文化』においてこの問題を集中的に取り上げた。H. Richard Niebukr, Christ and Culture, 1941. 赤城泰訳『キリストと文化』日本基督教団出版部、一九六七年、四五〇頁。ニーバーによれば「キリスト教（Christianity）は、それが教会、信条、倫理、あるいは思想運動などのいずれとして定義されようとも、それ自体キリスト（Christ）と文化（Culture）の両極間を往き来するものである。ゆえに、問題はキリスト教と文化ではなくて、キリストと文化の関係の問題でなければならない、とされる。

（4）「福音の文化的受肉」という表現は、「福音は文化という馬の背に乗って歴史の舞台に登場する」というラインホルト・ニーバー流の発想法を想起させる。ちなみに彼ラインホルトは先述のリチャード・ニーバーの兄で、ニューヨークのユニオン神学大学のキリスト教倫理（実際は「応用神学」“applied theology”と呼ばれていた）教授。

（5）キリスト者は、この世に生きるが、この世のものではない。In but not of this world. 戦後のエキュメニズム運動の中でよく聞かれたスローガン。ヤングは本書第七章「教典としての牧会書簡」の中に「この世のものとならずにこの世の中で?」という見出しで一節を割いている。（一九三―六頁）